

プロジェクトメンバー業績一覧

長田 俊樹 総合地球環境学研究所・プロジェクトリーダー

【編著】

Osada, T. and A. Uesugi (eds.) (2008) *Occasional Paper 4: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto.

Osada, T. and A. Uesugi (eds.) (2008) *Occasional Paper 5: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto.

Osada, T. and A. Uesugi (eds.) (2008) *Occasional Paper 6: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto.

ピーター・ベルウッド (長田俊樹・佐藤洋一郎監訳) 『農耕起源の人類史』地球研ライブラリー 6、京都大学学術出版会

【論文】

Osada, T. (2008) “Mundari”, in G.D.S. Anderson (ed.) *The Munda Languages*. Routledge Language Family Series, 3. Routledge, Abingdon (UK), pp.99-164.

Osada, T., G.D.S. Anderson and D. Harrison (2008) “Ho and the other Kherwarian languages”, in G.D.S. Anderson (ed.) *The Munda Languages*. Routledge Language Family Series, 3. Routledge, Abingdon (UK), pp.195-255.

Kharakwal, J.S., Y.S. Rawat and T. Osada (2008) “Preliminary observations on the excavation at Kanmer, Kachchh, India 2006-2007”, in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 5: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.5-24.

Shinde, V., T. Osada, A. Uesugi and Manmohan Kumar (2008) A report on excavations at Farmana 2007-08. T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 6: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.1-116.

【新聞記事】

長田俊樹 (2008.10.02) 「インダス文明発掘記 1」『聖教新聞 朝刊』

長田俊樹 (2008.10.09) 「インダス文明発掘記 2」『聖教新聞 朝刊』

長田俊樹 (2008.10.16) 「インダス文明発掘記 3」『聖教新聞 朝刊』

長田俊樹 (2008.12.04) 「インダス文明発掘記 10」『聖教新聞 朝刊』

古環境研究グループ

熊原 康博 群馬大学教育学部・プロジェクトメンバー

【論文】

熊原康博・近藤久雄 (2008) 「群馬県東部大間々周辺における活断層の地形学的認定」『えりあぐんま』14、1-13 頁.

鈴木康弘・渡辺満久・中田 高・小岩直人・杉戸信彦・熊原康博・廣内大助・澤 祥・中村優太・丸島直史・島崎邦彦 (2008) 「2008 年岩手・宮城内陸地震に関わる活断層とその意義 一関市巖美町付近の調査速報」『活断層研究』29、25-34 頁.

- 中田 高・隈元 崇・奥村晃史・後藤秀昭・熊原康博・野原 壯・里 優・岩永昇二 (2008) 「空中レーザー計測による活断層変位地形の把握と変位量復元の試み」『活断層研究』29、1-13 頁。
後藤秀昭・中田 高・岡田篤正・熊原康博・池田安隆・千田 昇・廣内大助 (2008) 『都市圏活断層図「岩国」』国土地理院技術資料番号：D・1-No.520。
八木浩司・東郷正美・今泉俊文・堤 浩之・熊原康博・宮内崇裕・鈴木康弘 (2008) 『都市圏活断層図「高山西部」』国土地理院技術資料番号：D・1-No.519。

長友 恒人 奈良教育大学教育学部・プロジェクトメンバー

【論文】

- 下岡順直・長友恒人・小畑直也 (2008) 「残存 TL を評価した TL 年代測定法の改良とそれを利用したレス堆積物の TL 年代と OSL 年代の比較」『奈良教育大学紀要』57-2、49-54 頁。
青木智史・出川哲朗・長友恒人 (2008) 「黄冶唐三彩窯跡出土陶片の熱ルミネッセンス (TL) 年代測定」『奈良教育大学紀要』57-2、85-91 頁。

【報告】

- 下岡順直・長友恒人・小畑直也 (2008) 「ルミネッセンス法を用いた原田遺跡堆積物の年代測定」『原田遺跡 (4) 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 12』島根県教育庁埋蔵文化財センター、155-161 頁。

【学会発表】

- Shitaoka, Y., T. Nagatomo and N. Obara (2008.9) An automated TL and OSL system with a low temperature sampleholder and four optical paths. 12th international conference on luminescence and electron spinresonance dating, Peking University.

- 重野 聖之・長友 恒人・須崎 憲一・下岡 順直・七山太・古川 竜太・猪熊 樹人 (2008.5) 「根室地域で発見された津波堆積物とテフラのルミネッセンス法による年代測定」日本地球惑星科学連合 2008 年大会、千葉市幕張メッセ。

- 長友恒人・下岡順直・小畑直也 (2008.6) 「考古遺跡堆積物の残存 TL を考慮した熱ルミネッセンス (TL) 法による年代測定の有効性ー光ルミネッセンス (OSL) 法との比較ー」日本文化財科学会 第 25 会大会、鹿児島国際大学。

- 長友恒人・下岡順直・小畑直也 (2008.6) 「考古遺跡を形成する堆積物の光ルミネッセンス (OSL) 年代測定ー多試料法と単試料法による蓄積線量評価の比較ー」日本文化財科学会 第 25 会大会、鹿児島国際大学。

- 重野聖之・七山太・長友恒人・下岡順直・須崎憲一・古川竜太・石井正之・猪熊樹人・北沢俊幸・中川 充 (2008.9) 「ルミネッセンス法を用いた津波堆積物と広域テフラの年代測定の試み」日本地質学会第 115 年学術大会、秋田大学。

- 下岡順直・長友恒人・鶴明信 (2009.3) 「テフラの TL 年代と既報年代との比較」第 25 回 ESR 応用計測研究会・2008 年度ルミネッセンス年代測定研究会合同研究会、浜松アクトシティー研修交流センター。

【その他】

- 下岡順直・長友恒人 (2008) 「ナウマンゾウ化石骨産出地層の光ルミネッセンス (OSL) 法を

用いた年代測定」『忠類にはナウマンゾウとマンモスゾウがいた！ 展示解説書』忠類ナウマン象記念館.

宮内 崇裕 千葉大学理学部・プロジェクトメンバー

【単行本】

宮内崇裕・理学研究科地球科学コース編 (2009) 『房総の自然 1 - 房総の地学散歩 (第2巻)』千葉日報社.

【論文】

Kagohara, K., T. Ishiyama, T. Imaizumi, T. Miyauchi, H. Sato, N. Matsuta, A. Miwa and T. Ikawa (2009) Subsurface geometry and structural evolution of the eastern margin fault zone of the Yokote basin based on seismic reflection data, northeast Japan. *Tectonophysics* 470, pp.319-328.

Tsumura, N., N. Komada, J. Sano, S. Kikuchi, S. Yamamoto, T. Ito, T. Sato, T. Miyauchi, T. Kawamura, M. Shishikura, S. Abe, H. Sato, T. Kawanaka, S. Suda, M. Higashinaka and T. Ikawa (2009) A bump on the upper surface of the Philippine Sea plate beneath the Boso Peninsula, Japan inferred from seismic reflection surveys: A possible asperity of the 1703 Genroku earthquake. *Tectonophysics* 472, pp.39-50.

Ito, T., Y. Kojima, S. Kodaira, H. Sato, Y. Kaneda, T. Iwasaki, E. Kurashimo, N. Tsumura, A. Fujiwara, T. Miyauchi, N. Hirata, S. Harder, K. Miller, A. Murata, S. Yamakita, M. Onishi, S. Abe, T. Sato and T. Ikawa (2009) Crustal structure of southwest Japan, revealed by the integrated seismic experiment Southwest Japan 2002. *Tectonophysics* 472, pp.124-134.

宮内崇裕・池田安隆・今泉俊文・佐藤比呂志・東郷正美 (2009) 『1/25, 000 都市圏活断層図「小田原」(第2版)』国土地理院技術資料 D・1-No.524.

【学会発表】

副田宜男・宮内崇裕 (2008) 「変動地形と断層モデルからみた東北日本背弧の上部地殻短縮変形と地形形成」日本地球惑星科学連合 2008 年大会、S141-005.

今泉俊文・石山達也・宮内崇裕・大町龍丸・森下信人・楳原京子・佐々木亮道・吉田春香・鈴木啓明・田代祐徳 (2008) 「常磐-三陸海岸での津波堆積物調査」日本地球惑星科学連合 2008 年大会、S141-P005.

佐藤比呂志・岩崎貴哉・金沢敏彦・宮崎真一・阿部進・斉藤秀雄・川崎慎治・伊藤谷生・宮内崇裕・平田直・川中卓・野口猛雄・穴田文浩・吉田進 (2008) 「片川秀基反射法地震探査・余震観測・地殻変動から見た 2007 年能登半島地震の特徴について」日本地球惑星科学連合 2008 年大会、S143-P001.

野口猛雄・穴田文浩・吉田進・浜田昌明・浜田憲彦・野原幸嗣・小野田敏・三橋明・宮内崇裕・佐藤比呂志 (2009) 「地震前後のレーザー計測と音響測深から求めた 2007 年能登半島地震の地殻変動」日本地球惑星科学連合 2008 年大会、S143-P002.

伊藤谷生・津村紀子・宮内崇裕・佐藤利典・亀尾浩司・小竹信宏・阿部信太郎・浅尾一己・林広樹・菊池伸輔・駒田希充・山本修治・石黒梓 (2008) 「新たなデータ集積が要求する房総半島ならびに周辺テクトニクス研究上の課題」日本地球惑星科学連合 2008 年大会、S143-P002、T229-022.

- Sato, H., S. Abe, H. Saito, T. Iwasaki, T. Kanazawa, N. Kato, T. Ito, T. Miyauchi, S. Miyazaki, F. Anada, S. Yoshida, T. Noguchi, S. Kawasaki and T. Kawanaka (2008) "A Two-Ship Seismic Reflection Profiling of the Source Fault of the 2007 Noto Hanto Earthquake (M6.9), Central Japan". Seismix 2008 (The 13th International Symposium on Deep Seismic Profiling of the Continents and Their Margins), Finland.
- Ito, T., Y. Ikeda, T. Iwasaki, K. Kano, H. Sato, N. Hirata, S. Abe, T. Miyauchi, S. Yamakita, M. Higashinaka, S. Suda and T. Kawanaka (2008) "Initial Structure of the Itoigawashizuoka Tectonic Line Emerging from the Recent Deep Seismic Profiling, Central Japan". Seismix 2008 (The 13th International Symposium on Deep Seismic Profiling of the Continents and Their Margins), Finland.
- 宮内崇裕 (2009) 「変動帯に発達する海成段丘の波状変位が示す地殻変動は地震性？」日本地球惑星科学連合 2009 年大会、S147-004.
- 渡辺和樹・宮内崇裕 (2009) 「第四紀後期海成段丘の高度分布と断層モデルに基づく佐渡島大佐度山地の隆起プロセス」日本地球惑星科学連合 2009 年大会、S147-P012.
- 八戸香奈依・宮内崇裕 (2009) 「化石石灰藻による古地震復元の試みー相模トラフを震源とする巨大地震サイクルに関連してー」日本地球惑星科学連合 2009 年大会、S147-P018.
- 今泉俊文・宮内崇裕・石山達也・原口強・鈴木啓明 (2009) 「三陸海岸・常磐海岸に残された完新世後期津波堆積物調査」日本地球惑星科学連合 2009 年大会、S154-P004.
- 古屋裕・橋間昭徳・津村紀子・佐藤利典・宮内崇裕・亀尾浩司・伊藤慎・伊藤谷生・平田直・佐藤比呂志・荒井良祐・山本修治・阿部信太郎 (2009) 「内房海上反射法探査によって新たに得られた房総半島南部最近約 100 万年間地殻変動上の基礎データ」日本地球惑星科学連合 2009 年大会、S221-P012.

生業研究グループ

大田 正次 福井県立大学生物資源学部・コアメンバー

【論文】

- Matsuoka, Y., M.J. Aghaheii, M.R. Abbasi, A. Totiaei, J. Mozafari and S. Ohta (2008) Durum wheat cultivation associated with *Aegilops tauschii* in northern Iran. *Genetic Resources and Crop Evolution* 55: 861-868.
- 大田正次 (2009) 「トルコで見つけた不思議な穂ー地中海地域における一年生野生植物の発芽適応戦略をめぐって」種生物学研究 32 『発芽生物学』 195-203 頁、文一総合出版.
- 大田正次 (2009) 「野生コムギの農業生態系への適応と栽培化」国立民族学博物館調査報告 84 『ドメスティケーションーその民族生物学的研究ー』 153-176 頁.

【その他】

- 大田正次・岸本あゆみ (2008) 「野生二倍性コムギにおいて異なる小花に着いた穎果の間に見られた形態と休眠性の顕著な相違」『育種学研究』 第 10 巻別冊 1 号、126 頁.

千葉 一 東北学院大学・プロジェクトメンバー

【その他】

千葉 一 (2008) 「南インドという先端の伝承性を考える I」『地理』9月号、古今書院、102-108頁。

千葉 一 (2009) 「南インドという先端の伝承性を考える II」『地理』2月号、古今書院、102-109頁。

千葉 一 (2009) 「南インドにおけるエンマー小麦の栽培分布に関するノート」『インダス・プロジェクト ニュースレター』第5号、総合地球環境学研究所インダス・プロジェクト、7-16頁。

千葉 一 (2009) 「報告要旨：インドの経済格差に潜む伝統文化の有効性」『経済地理学年報』H21 第3号（経済地理学会編集）。

【口頭発表・講演】

千葉 一 (2008.3) 「三陸の海からインダスを望む」宮城県本吉町前浜「前浜おらほの“とっておき”2008」

Chiba, H. (2009.2) “Cultural Similarities between South India and Japan”. カルナータカ州立カンナダ大学院大学、少数民族研究学部での講演。

千葉 一 (2009.3) 「南インドの農耕文化とインダス文明」宮城県本吉町前浜「前浜おらほの“とっておき”2009」

物質文化研究グループ

上杉 彰紀 総合地球環境学研究所・プロジェクトメンバー

【編著】

Osada, T. and A. Uesugi (eds.) (2008) *Occasional Paper 4: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto.

Osada, T. and A. Uesugi (eds.) (2008) *Occasional Paper 5: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto.

Osada, T. and A. Uesugi (eds.) (2008) *Occasional Paper 6: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto.

【論文】

上杉彰紀 (2008) 「バローチスターン高原における人物土偶に関する覚書-岡山市立オリエント美術館の資料紹介を兼ねて-」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』第22巻、岡山市立オリエント美術館、1-28頁。

上杉彰紀・小茄子川歩 (2008) 「インダス文明社会の成立と展開に関する一考察」『西アジア考古学』9、日本西アジア考古学会、101-118頁。

上杉彰紀 (2008) 「インダス文明社会の成立と展開-地域間交流の視点から-」『古代文化』第60巻第2号、古代学協会、111-120頁。

Shinde, V., T. Osada, A. Uesugi and Manmohan Kumar (2008) “A Report on Excavations at Farmana 2007-08”, in *Occasional Paper 6: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.1-116.

上杉彰紀 (2008) 「インダス・プロジェクトによるインダス遺跡の発掘調査」『総合地球環境学研究所プロジェクト H-03 「環境変化とインダス文明」 2007 年度成果報告書』総合地球環境学研究所、83-114 頁。

上杉彰紀 (2009) 「インダス・プロジェクト 2008-インド・パキスタンにおけるインダス文明遺跡の調査-」『第 16 回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、108-113.

【新聞記事】

上杉彰紀 (2008.6.26) 「イランの遺跡を訪ねて」『北海道新聞 夕刊』

上杉彰紀 (2008.10.23) 「インダス文明発掘記 4」『聖教新聞 朝刊』

上杉彰紀 (2008.10.30) 「インダス文明発掘記 5」『聖教新聞 朝刊』

上杉彰紀 (2008.11.6) 「インダス文明発掘記 6」『聖教新聞 朝刊』

上杉彰紀 (2008.11.13) 「インダス文明発掘記 7」『聖教新聞 朝刊』

【口頭発表】

Uesugi, A. (2008.5.25) “A Note on the Significance of the Kulli Culture for Bridging the Indus Valley and the Iranian Plateau”. Second International Conference of Society of South Asian Archaeology. Shiraz, Iran.

Uesugi, A. (2008.6.7) “Cultural Interaction between the Indus Valley and the Iranian Plateau”. International Seminar: Cultural Relations between the Indus and the Iranian Plateau during the Third Millennium BCE. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto.

Uesugi, A. (2008.9.23) “Indus Project: Recent Excavations at Kanmer and Farmana”. Lecture at Maharaja Sayajirao University of Baroda.

Uesugi, A. (2008.9.24) ‘From Indus to the Iranian Plateau’. Lecture at Maharaja Sayajirao University of Baroda.

Uesugi, A. (2008.10.16) “Recent Excavations at Kanmer, Kachchh, Gujarat”. Lecture at Center for South Asia, University of Wisconsin-Madison.

Uesugi, A. (2008.10.17) “Early Harapan and Harappan Traditions in Haryana, India: New Discoveries from Girwad and Farmana”. The 37th Annual Conference on South Asia, University of Wisconsin-Madison.

上杉彰紀・寺村裕史 (2009.3.15) 「インダス・プロジェクト 2008 -インド・パキスタンにおけるインダス文明遺跡の調査-」第 16 回西アジア発掘調査報告会、日本西アジア考古学会。

宇野 隆夫 国際日本文化研究センター・コアメンバー

【編著】

王維坤・宇野隆夫 編 (2008) 『古代東アジア交流の総合的研究』日文研叢書 42、国際日本文化研究センター。

【論文】

宇野隆夫 (2008) 「京都中世城郭の GIS 分析」『文化遺産と芸術作品を自然災害から防御するための学理の構築』立命館大学歴史都市防災研究センター、127-132 頁。

宇野隆夫 (2008) 「考古博物館の将来像」『関西を創造する』和泉書院、242-260 頁。

宇野隆夫 (2008) 「GPS・GIS を用いたオマーン前期青銅器時代墳墓群の分布研究」『京都歴史災害研究』9、立命館大学歴史都市防災センター、1-11 頁。

宇野隆夫 (2008) 「インダス文明の都市と地形環境」『総合地球環境学研究所プロジェクト H-03 「環

境変化とインダス文明」2007年度成果報告書』総合地球環境学研究所、55-60頁。

Teramura, H., Y. Kondo, T. Uno, A. Kanto, T. Kishida and H. Sakai (2008) "Archaeology with GIS in the Indus Project", in *Occasional Paper 5: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Reserch Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.45-102.

宇野隆夫 (2009) 「豊中の古代遺跡」『新修豊中市史』第1巻通史1、196-206頁。

宇野隆夫 (2009) 「豊中の中世遺跡」『新修豊中市史』第1巻通史1、449-460頁。

宇野隆夫 (2009) 「中央アジアゼラフシャン川中流域におけるシルクロード都市の分布」『文化遺産と芸術作品を自然災害から防御するための学理の構築』立命館大学歴史都市防災研究センター、161-166頁。

宇野隆夫 (2009) 「交通と運輸の技術」『弥生時代の考古学6 弥生社会のハードウェア』同成社、97-106頁。

【その他】

寺村裕史・近藤康久・宇野隆夫・菅頭明日香・岸田徹・酒井英男 (2008) 「インダス・プロジェクトにおける考古学 GIS 班のこれまでの活動」『総合地球環境学研究所プロジェクト H-03「環境変化とインダス文明」2007年度成果報告書』総合地球環境学研究所、61-72頁。

宇野隆夫 (2008) 「GIS を基盤とする考古・歴史民俗・環境情報の高度連携研究」『論壇 人間文化』3、人間文化研究機構、136-147頁。

【学会発表】

芳賀満・古庄浩明・宇野隆夫・相馬拓也 (2008.3) 「中央アジアのギリシア系都市を掘るーウズベキスタン共和国カンピール・テパ第2次発掘調査ー」第15回西アジア発掘調査報告会、日本西アジア考古学会。

小磯 学 神戸夙川学院大学・プロジェクトメンバー

【論文】

小磯 学 (2008) 「インダス文明の腐食加工紅玉髓製ビーズと交易活動」『古代文化』60-2、95-110頁。

小磯 学 (2008) 「カーンメール遺跡出土の紅玉髓製ビーズとペンダント」『総合地球環境学研究所プロジェクト H-03「環境変化とインダス文明」2007年度成果報告書』総合地球環境学研究所、73-82頁。

【その他】

小磯 学・小磯千尋 (2008) 「南アジアの食文化をめぐって」『地理・地図資料』2008年6月号、20頁。

小磯 学 (2008.6.25) 「変貌するインド：村のケータイ」『インド・ビジネス・センターポータルサイト (ビジネスプレミアムページ)「インドチャンネル」掲載コラム』

小磯 学 (2008.8.5) 「もうひとりの女神」『インド・ビジネス・センターポータルサイト (ビジネスプレミアムページ)「インドチャンネル」掲載コラム』

小磯 学 (2008.10.3) 「インダス文明の宝ー紅玉髓製ビーズ」『インド・ビジネス・センターポータルサイト (ビジネスプレミアムページ)「インドチャンネル」掲載コラム』

【講演会】

小磯 学 (2008.5.22) 「アジアの世界遺産－インドの宗教事情」大学連携事業連続講座「ひょうご講座」(財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構学術交流センター主催 第 2 回世界遺産を学び観光文化を考える.

寺村 裕史 総合地球環境学研究所・プロジェクトメンバー

【論文】

Teramura, H., Y. Kondo, T. Uno, A. Kanto, T. Kishida, and H. Sakai (2008) “Archaeology with GIS in the Indus Project”, in *Occasional Paper 5: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. RIHN, pp.45-102.

【新聞記事】

寺村裕史 (2008.11.20) 「インダス文明発掘記 8」『聖教新聞 朝刊』

寺村裕史 (2008.11.27) 「インダス文明発掘記 9」『聖教新聞 朝刊』

【学会発表】

寺村裕史 (2008.12.13) 「GIS を用いた遺跡のデジタル測量と遺跡空間データベースの構築」人文系データベース協議会 人文科学とデータベース 第 14 回 公開シンポジウム、同志社大学.

鎌倉快之・津村宏臣・寺村裕史 (2008.11.21) 「LRF による簡易測量と GIS アーカイブの現状」第 13 回 遺跡 GIS 研究会、奈良文化財研究所.

上杉彰紀・寺村裕史 (2009.3.15) 「インダス・プロジェクト 2008 -インド・パキスタンにおけるインダス文明遺跡の調査-」第 16 回西アジア発掘調査報告会、日本西アジア考古学会.

【ポスター発表】

津村宏臣・鎌倉快之・澤田砂織・寺村裕史 (2008.6.14-15) 「文化財総合情報システム STIS の開発と応用－ローカルナレッジとしての文化知の可視化と定量評価に向けて－」日本文化財科学会第 25 回大会研究発表.

伝承文化研究グループ

大西 正幸 総合地球環境学研究所・コアメンバー

【論文】

大西正幸・児玉望・長田俊樹・高橋慶治 (2008) 「南アジアにおける 4 言語グループの分布と特徴」『総合地球環境学研究所プロジェクト H-03「環境変化とインダス文明」2007 年度成果報告書』総合地球環境学研究所、171-179 頁.

【書評】

Onishi, M., S. Tida, R. Ono, Y. Negishi, H. Tadokoro and T. Furusawa (2009) Book Review on Andrew Pawley, Robert Attenborough, Jack Golson, and Robin Hide (eds.) *Papuan pasts: cultural, linguistic, and biological histories of Papuan-speaking people. Peoples and cultures of Oceania* 24: pp. 81-87.

【編集】

大西正幸・稲垣和也（編）（2009.3）『地球研言語記述論集 1』、総合地球環境学研究所インダス・プロジェクト。

【その他】

大西正幸（2009）「序文」『地球研言語記述論集 1』、総合地球環境学研究所インダス・プロジェクト、iii-vi 頁。

大西正幸（2008）「言語 WG 主催 ニコラス・エヴァンス講演会の報告」『インダス・プロジェクト ニュースレター』第 3 号、総合地球環境学研究所インダス・プロジェクト、27 頁。

大西正幸（2008）「国際ワークショップ「歴史言語学の現在」」『インダス・プロジェクト ニュースレター』第 4 号、総合地球環境学研究所インダス・プロジェクト、13-14 頁。

【口頭発表】

大西正幸（2008.5.13）「言語の多様性を地図で見せる—琉球語やんばる（沖縄北部）方言の言語地図をめぐって」地球研談話会。

大西正幸（2008.7.5）「英語教育のコモンセンス」『沖縄言語研究センター年次総会』第 31 回（2008 年 7 月 5-6 日）、琉球大学。

大西正幸（2008.7.6）「言語地図のさまざまな可能性」『沖縄言語研究センター年次総会』第 31 回（2008 年 7 月 5-6 日）、琉球大学。

大西正幸（2008.11.6）‘Gender Marking in Nasioi, Motuna and Buin’『インダス言語研究会』第 3 回、地球研。

【講演等】

大西正幸（2008.3.30）「ベンガル語出版物の歴史と現状」『国立国会図書館関西館アジア情報課 招聘セミナー』、精華町、京都府。

児玉 望 熊本大学文学部・プロジェクトメンバー

【論文】

児玉 望（2009）「出水方言のモーラ声調単位とイントネーション」『ありあけ熊本大学言語学論集』8、1-26 頁。

児玉 望（2009）「韻律構造境界声調表示の類型論」『ありあけ熊本大学言語学論集』8、27-36 頁。

大西正幸・児玉 望・長田俊樹・高橋慶治（2008）「南アジアにおける 4 言語グループの分布と特徴」『総合地球環境学研究所プロジェクト H-03 「環境変化とインダス文明」2007 年度成果報告書』総合地球環境学研究所、171-179 頁。

【口頭発表】

児玉 望（2008.4.5）「テルグ語簡易文法をめぐって (1)」『インダス言語研究会』第 5 回、総合地球環境学研究所。

児玉 望（2008.5.24）「テルグ語簡易文法をめぐって (2)」『インダス言語研究会』第 6 回、総合地球環境学研究所。

児玉 望（2009.3.19）「非文字説と文明の継承」社文研フィールドリサーチセミナー 3 『文明と文字 記録 vs. 記憶』放送大学熊本学習センター。

後藤 敏文 東北大学大学院文学研究科・コアメンバー

【論文】

Gotō, Toshifumi (2008) Reisekarren und das Wohnen in der Hütte: śālām as im Śatapatha-Brāhmaṇa. *Indologica. T. Ya. Elizarenkova Memorial Volume*, Book 1, Moscow: Compiled and edited by L. Kulikov, M. Rusanov. Moscow: pp.115-125.

Gotō, Toshifumi (2009) Der Optativ *bhrjyēyur* in den Yajurveda-Samhitās. *Zarathushtra entre l'Inde et l'Iran. Études indo-iraniennes et indo-européennes offertes à Jean Kellens à l'occasion de son 65e anniversaire*. ed. par Éric Pirart et Xavier Tremblay. Wiesbaden: pp.107 – 113.

【その他】

後藤敏文 (2008) 「古インドアーリヤ語」「アヴェスタ語」月刊『言語』Vol.37、12月号、特集「古典語・古代語の世界」:36 – 44、80 – 83.

高橋 慶治 愛知県立大学文学部・プロジェクトメンバー

【論文】

大西正幸・児玉 望・長田俊樹・高橋慶治 (2008) 「南アジアにおける4言語グループの分布と特徴」『総合地球環境学研究所プロジェクト H-03 「環境変化とインダス文明」2007年度成果報告書』総合地球環境学研究所、171-179頁.

【口頭発表】

Takahashi, Y. (2008.9.9) “On the verbal affixes in West Himalayan”. Symposium of Linguistic Substrata in Tibeto-Burman Area, Sept. 9-11, National Museum of Ethnology (Osaka)

外川 昌彦 広島大学大学院国際協力研究科・プロジェクトメンバー

【単行本】

外川昌彦 (2008) 『聖者たちの国へーベンガルの宗教文化誌』NHK ブックス.

外川昌彦(2009)『宗教に抗する聖者ーヒンドゥー教とイスラームをめぐる「宗教」概念の再構築』世界思想社.

【論文】

外川昌彦 (2008) 「創られた『ヒンドゥー教』ーベンガルのチャイタニヤ伝における”Hindu”の用法について」『宗教研究』日本宗教学会 第356号、25-46頁.

Togawa, M. (2008) Syncretism Revisited: Hindus and Muslims over a Saintly Cult in Bengal. *Numen* Vol.55, pp. 29-45.

森 若葉 総合地球環境学研究所・プロジェクトメンバー

【論文】

森若葉 (2009) 「バビロニア人からみたシュメール語～最近のシュメール語研究によせて」『シリア・メソポタミア世界の文化接触：民族・文化・言語研究集会報告集 セム系部族社会の形成・ユーフラテス流域ビシュリ山系の総合研究』文部科学省科学研究費 特定領域研究 (研究領域番号:124)、10-19 頁.

前川和也・森 若葉 (2008) 「初期メソポタミア史のなかのディルムン、マガン、メルッハ」『総合地球環境学研究所プロジェクト H-03 「環境変化とインダス文明」2007 年度成果報告書』総合地球環境学研究所、155-167 頁.

【その他】

森 若葉 (2008) 「ピーター・ベルウッド著 (長田俊樹・佐藤洋一郎監訳) 『農耕起源の人類史』の紹介」『インダス・プロジェクトニュースレター』第 4 号、総合地球環境学研究所インダス・プロジェクト、14-15 頁.

前川和也・森 若葉 (2008) 「初期メソポタミア史のなかのディルムン、マガン、メルッハ」『Integrated Research in the Bishri Mountains on the Middle Euphrates セム系部族社会の形成 特定領域研究「セム系部族社会の形成・ユーフラテス流域ビシュリ山系の総合研究」Newsletter』11、14-23 頁.

池田 潤・森 若葉 (2008) 「古代オリエント言語研究の動向－第 53 回国際アッシリア学会報告」『オリエント』第 50 号.

【翻訳】

森 若葉 (2008) 「第 9 章 語族は人類の先史に対してどのような意味をもつのか」「第 10 章 農耕の拡散－考古学と言語学の比較から」長田俊樹・佐藤洋一郎編『農耕起源の人類史』地球研ライブラリー 6、京都大学学術出版会、279-398 頁.

【口頭発表】

Mori, W. and K. Maekawa (2008.6.7-8) “Dilmun, Magan and Meluhha in Early Mesopotamian History: 2500-1600 BC”. International Symposium ‘Cultural Relations between the Indus Valley and the Iranian Plateau during the Third Millennium BC’. Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto.

森 若葉 (2008.5.24-25) 「シュメール文学作品にみられる異国の文物：シュメール、アッカド人からみた周辺世界」第 51 回シュメール研究会、京都大学.

森 若葉 (2008.6.10) 「楔形文字の世界」兵庫県阪神シニアカレッジ 国際交流学科.

森 若葉 (2008.12.13) 「楔形文字－あなたの名前を古代メソポタミアの文字で書いてみよう」三重県多気町多気郷土資料館.